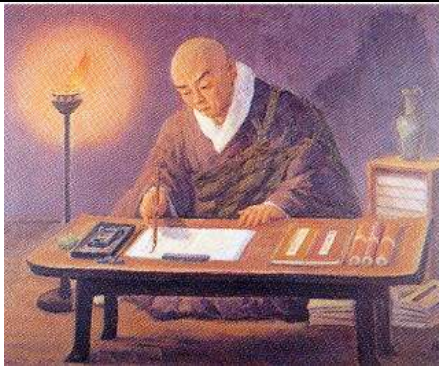


無量壽

平成18年1月1日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗物語⑦

聖人は京都に帰られた後、第九号に紹介した三帖和讃をはじめ多くの書物を書かれましたが、そのほかに、関東の門弟に対して多くの手紙を出されて、教えを説いておられます。このように、関東のお弟子と京都の聖人



聖人 著述に励まれる (武永 楨雄 画)

とは、遠く距離を隔てながらも信心の上で強い結びつきを保ち続けていたのです。

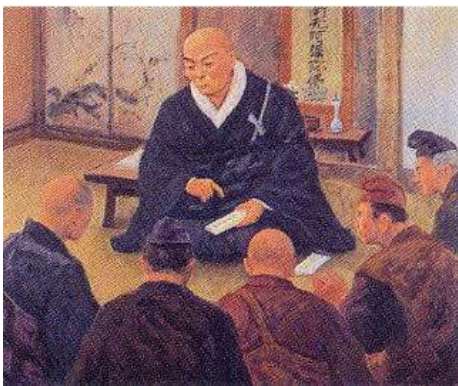
このお弟子

に対するお手紙は現在、四十三通残されています。

ところがその後の関東では、鎌倉幕府によ

る念仏の弾圧などからお弟子の間に動揺が生じてきました。お手紙による布教だけでは不十分と感じられた聖人は、お子様の善鸞様ぜんらんを自らの代行として、お弟子の教化にあたらせるため関東に派遣されました。

善鸞様は聖人から与えられた任務を果たして関東のお弟子達を再統一しようと努力をなさいましたが、かえって有力なお弟子達と反目しあう結果となってしまいました。そのため善鸞様は自らを優位に立たせようと「自分は聖人の実子であり、聖人の本当の教えは私だけが密かに伝えられている」と主張するようになったのです。これでお弟子達は



聖人と面談されるお弟子 (武永 楨雄 画)

こうなると、聖人に直接会って本当のことをお聞きするしかない

聖人を訪ねて来ました。この時の様子が、後にお弟子の唯円房ゆいえんぼうが書いたと言われる『歎異抄』に記されています。

「皆さんが多くの国を超えて命がけでお訪ね下さったのは、ひとえに往生極楽の道を問ひ聞かんが為のことでしょう。中略、親鸞においては、ただ念仏して阿弥陀様にお助けいただきましょうという法然上人からの教えをこうむって、それを信じるほかには何も特別なことはありません。」後略 (住職訳)

当時、関東から京都までの旅はまさに命がけのことであったと思います。その命がけの旅をしてきたお弟子達に対する聖人の答えですから、私達もじっくりと味わいたいものです。

一方善鸞様は、お弟子を取りまとめることがなかなかできないことから、とうとう有力なお弟子達を鎌倉幕府に訴え出るという過激な手段を用いました。そのため何人かのお弟子がとらえられてしまったのです。

続く

浄土真宗の作法・心得（シリーズ5）

法事

法事とは「仏法の行事」という意味で、法要とも言います。一般には亡くなった方の命日を縁としてつとめられる「年忌法要」を指しています。

年忌の数え方

一年後：一周忌（亡くなった年から一年目）

二年後：三回忌（亡くなった年、一周忌と数えて三回目の命日）

六年後：七回忌（以下、三回忌と同様）

十二年後：十三回忌

十六年後：十七回忌

二十二年後：二十三回忌

二十六年目：二十七回忌

三十二年目：三十三回忌

四十九年目：五十回忌

以後は、五十年ごとにつとめます。



法事は、亡くなった方の遺徳を偲び報恩感謝の

思いを深める場であると同時に、故人の命日を縁として仏法を聴聞する大切な機会でもあります。

私達も何時かは仏様となって、多くの方から押んでいただく身であることにあらためて気づかせてもらい、この生命を無駄にすることなく、精一杯生き抜いていかねばならないという事を、亡くなった方からの命がけの教えとしてお聞かせいただく場が法事であるといえます。ですから法事に招かれた際には、久しぶりに出会う親類・縁者に挨拶をすることも大事ですが、**何よりもまずお仏壇に手を合わせ仏様への挨拶を優先したい**ものです。

なお、法事は祥月命日（亡くなられたその月のその日）の当日かそれより早めにつとめるのが一般的です。仏事をのぼしのぼしにしないようにという心構えの現われだと言われています。そのように心がけて、日程を住職に相談いただければ幸いです。

連研参加者募集中

来年から、第十期「新潟組連続研修会（連研）」が新たに始まります。これは新潟市近辺のお西のお寺を会場に、二年間で十二回の研修を行うものです。

研修といっても、そんなに堅苦しいものではありません。浄土真宗の教えについての学習はもちろんですが、話し合い法座、お経の読み方や焼香などの作法の練習、仏教讃歌の練習などもあります。

この連続研修の受講者を募集しています。希望の方は十七年度中に林徳寺へお申し出ください。なお、参加費は寺院負担です。

